

## 蛙〈かえる〉と猿（美方町神場）



秋もおわりごろでした。すっかり稲刈〈いねか〉りもすんでからのことです。

一匹のかえるが、せっせと稲穂〈いなほ〉をひろいあつめ、臼〈うす〉を持ち出し、もちをつけていました。するとそこへ一匹のさるがでてきました。そして、さるはいいました。

「かえるさん、かえるさん。ぼくがもちをついたげましょか。」

かえるは、これはありがたいと思い、よろこんでさるにもちをつけてもらいました。

さるは考えました。

「このままでは、せっかくのもちも半分しかくわあもないなあ（食べようもない）。」と、

そこで、さるはもちのつけるのをまって、

「かえるさん、かえるさん、もちはつけたし、このままくうのはおもしろくない（おもしろくない）、いっさ（いっそのこと）もちを臼といっしょに、下の谷へころがして、はようそのもちの所までおりたものがこのもちをくうことにしたらどないだらあ（どうだろう）。」と、話をもちかけました。

かえるも、「それはよかろう。」と相談はまとまりました。

そこで、かえるとさるは「よいしょ。」とばかり、もちの入った臼を下の谷へころがしましたが、そのひょうしに、もちは臼から出て木の株〈かぶ〉にひっかかってしまいました。もちのとび出した臼はゴロゴロ、ゴロゴロいきおいをまして谷へころんでいきます。さるは臼を追いかけるように山をかけおり、とまった臼のところへたどりつきましたが、臼の中にはもちはありません。

「あれ」と思って、谷底から上を見あげると、かえるは山の上の切り株にすわって、おいしそうにもちをたべています。さるはしぶとくかえるのところへ登っていき、切り株のよこへすわりました。そして、かえるがもちをたべるのを見ながら、残念そうにいいました。

「かえるさん、かえるさん、もちが流れるがの。」と、

かえるは、「流れるところから、なんぶりしょ。」と、つきたてのもちをたべます。

「かえるさん、かえるさん、もちがたらけるがの。」と、さるはほしそうにいいます。

かえるは、「たらけるところから、たんぶりしょ。」と、みるみるうちに、さるの前でもちをたべてしまいました。あまりよくばると、損をするというおはなしです。

